本屋の青空

鳥取市　定有堂書店
店主　奈良敏行

二〇〇八年　中国新聞

① 就職しないで生きるには
② 個性派書店
③ 物語のある本屋
④ 町の本屋
⑤ 地域が広がる
⑥ 本を並べる
⑦ 「本」の底力
⑧ 本屋の身の丈

① 就職しないで生きるには

本屋を鳥取市に開業して２８年になる。全くの素人だった。高校まで九州。大学進学で東京の私学に進み、同じ文学部で知り合った細君の故郷で独立自営が始まった。東京でいくつか職を重ねた跡の三十過ぎた秋だった。

素人だけど、人一倍本は好きだった。そんな自分の素人開業体験から、最近東京の一流の書店に勤めることになった女子大生に、こう助言してあげた。

「本屋のキャリアは、就職した瞬間から始まるのでなく、本が好きになった時から始まっている」と。本屋のスキル（技量）は学ぶというより、本好き本屋好きの自分そのものがスキルなのだ（きっと）。

地元タウン誌から、本屋の紹介に際して、「人生の一冊は？」と問われ、迷うことなく『就職しないで生きるには』レイモンド・マンゴー晶文社を上げた。１９６０年代のカウンターカルチャーの本だ。あの頃はオルタナティブな（もう一つ他の）生き方が問われた時代だ。既成のレールに乗った

生き方でなく、何かしらすべてが自分ひとりから始まる生き方がないか模索された熱い時代だ。
いまならたぶん、フリーマーケットから始まる何かのようなものだ。往来に「モノ」を並べて買ってもらう。自分が作ったものもあるし、自分が買ったモノのときもある。重要なのは、「作ったもの」と「買ったもの」が等価だということだ。
ここには自分という「物語」があり、だからこそ自分のコントロールできる世界で、人と人との交わりが始まるのだ。

---

②個性派書店

本屋は３０坪で始めた（のち増床して５０坪）。やがて郊外に主流が移り、図書館と競うようなメガ書店も出現し、「書店探訪ブーム」の隆盛で、雑誌でも書店特集が頻繁に組まれた。ある雑誌に紹介され、のち書店特集だけ抜いてムックとなった。
初出で定有堂は大書店と同じ分量で紹介された。一緒にまとまるとバランスの悪いものになるんじゃないかと心配した。店舗の広さ、在庫の量、とても比較にならないからだ。刊行され頁を開いてみると、「個性派書店」という分類で納まっていた。
ビックリした。自分の立ち居地を示されたからだ。大きい小さいという目安だけでなく、もう一つの居場所があるんだということを知った。
かつて開業を準備する時、取次（日販）の人たちが、親身になって「あまり本好きだから、自分の趣味は抑えてね」と戒めてくれた。
むろん生業のための開業だから、「自分」なんてお蔵入りでけっこうだった。だからお客さんの「こんな本置いたらいいよ」という言葉の周辺だけをていねいに追い求めた。ある出版社（晶文社）に３ヶ月で一定数売れたら常備店にしてあげると目標を与えられた時は、情報感度の抜群なお客さん（ＴＶ局にお勤めだった）が、本の選択をしてくれた。むろん目標は達成できた。自分のこだわりじみた本の嗜好はいつしか忘れ、人文書のお店といわれるようになった。
この春大阪の本社へ転勤した本好きの人とそんな話をカフェでしてたら、「個性を捨てて個性派書店だね」と言ってくれた。

③物語のある本屋

「好きではじめる」にとてもこだわる。損得ではじめる人はあっけなくやめる。おさえがたい思いで開業する人は、相撲でいう徳俵を持っている。終わったところで終わらない。もう一つねばる力が立ち上る。

私は育った時代のせいか、ミニコミが好きだった。いますぐ「身の丈」で始める、という性急さにミニコミづくりはピッタシだった。２０代の頃『定有』というガリ版刷り（なつかしい！）の小冊子を作っていた。

三十過ぎて始めた本屋の店名も、自然と「定有堂」となった。独立自営を生業としようとした時、本好きが突出してたのだろうか、周囲の友人は本屋をすすめた。何を選択しても、間違いなく私はミニコミづくりとサークルづくりを手がけたはずだ。むしろこの二つにおさえがたい思いがあった。

そんな思いをお客さんと語り合ううちに、「フランス語講座」や「心理学講座」が始まった。鳥取市は小さいけれど県庁所在地。大学の先生や新聞社、放送局といろんな人材で豊かなのだ。先生は「町の寺子屋だね」と「定有堂教室」と名付けてくれた。現在２０年以上続いているのに、人文書読書会の「読む会」と「シネクラブ」という映画トークの会がある。近くの放送局の人が転勤の度にリレーしてくれて現在９代目の講師になる。（お客さん編集の書評誌『定有堂ジャーナル』も８年つづいた。）

本を並べて売るだけの本屋だが、この間にたくさんの人たちが関わることで「物語」が紡がれる。それがとても大事な徳俵だ。

④町の本屋

生来の本屋好きなので、本好きの人はもちろん本屋仲間と交流するのも大好きだ。大書店の人によく「あなたは小さいからいいね。」と言われる。「エッ？」。書店と本屋という二つの立ち居地があるのに気づいた。

本屋は小さいということもあるけど、書店のように地域を股に掛けるのでなく、いやおうなしに地域に根ざす。町の本屋という言葉もあるのだ。

郊外のメガショップでさえも集客には仕掛けを必要とする。ネットでさえもナンバーワンでないと生き残れない。それに比べれば町の本屋は普通の本屋だ。普通というのは往来にあるということだ。郊外すらも疲弊のすすむ先進国（？）アメリカは、「歩ける町」ということが口にされているらしい。歩いていろいろお店をはしごできる適切な狭さ。もう一つは歩いても安全な町中。

文化人類学の本をひもとくと、昔は一つの集落の中はみな兄弟のようなものだから、モノの貸し借りはあっても、売買なんて水臭いものはなかった。よそ者がやってきて売る。あるいは集落の境界で定期的に市が立つ。集落内で販売する者があっても、それはとても名誉をかけた商いで、扱う商品も一つだけ。近代は「境界」のなくなる時代で、扱う商品も一人で多品種となった。そして名誉のありどころもあいまいになった。

町の本屋って、とても人の意欲の原型にあるもののように感じる。ネットの隆盛で忘れ去られていく遺産のような存在だが、人と人が触れ合えることが喜びである限り、常に一周遅れのトップランナーに違いないと思うのだ。

---

⑤地域が広がる

往来の中に、生きる根拠を根付かせるのが町の本屋。しかし、往来が疲弊しているのが現状だ。

近頃、鳥取市の中心地にマンションが増えている。一時は大型店が消えると、跡地利用は駐車場くらいしかなかった。今はマンションだ。そして街中に人が増える。しかしなぜ？みんないろいろ噂する。郡部のお金持ちが街中で隠居する。核家族化。しかし売れるから増えるのでなく、あるから売れるのが事実。建て続けているのは四国などの業者。建てる場所が周辺になくなったから、山陰へ越境しつづけているらしい。

地域の変貌が、もう地域の中だけに理由を見つけられない時代になった。気の早い人は道州制を口にする。広島がいずれ行政の中心になる。本屋関係でいえば、鳥取は読書立県なので県立図書館の図書費が全国レベルで潤沢。でも広島はそうではないらしい。どうなるのだろう？

地域主権型道州制の議論にはわからない事が多い。中央集権を打破する。そのためには地域の人材再教育が大事。中央の決定を執行する人材から、自分で調べ判断し、自分で実行する人材が重要となる。この論理に基づいて、鳥取県は図書館を重要視し「民主主義の砦」とまでいう。

しかし、地域人材の再教育の他に、もう一つの選択肢が隠されている。それはヘッドハンティングだ。中央での需要半減で、人材が流入する現実だ。形を変えた中央の支配だ。

いずれにしろ、モノではなくヒトに投資する時代が始まる。町の本屋の役割も地域を小さく守るということの中に鮮明だ。

---

⑥本を並べる

時どき面白い本屋だね、と言ってもらえる。理由はささいな事で、同じ棚に、文庫新書と単行本が並んでいる、という類のことだ。探しにくいねという人もいる。

大きな書店を見慣れているところからの感想だ。小さい本屋では、探すというより本と戯れると思ってもらった方がありがたい。

本好き本屋好きの店が選んだ「本」の現在。それを体験してもらうのが本屋の醍醐味。セレクトショップというらしい。自分では「なんでもあるわけではないけれど、どれでもある。」と説明する。わかるようでいても一つわからない。でも他に言いようも浮かばない。

本屋には手に触れた日にその本が動くというジンクスがある。棚に差した文庫本など一年動いてないから返品！と思って抜きかける。表紙を見た瞬間、「あ！これは自分が悪かった」と面出しで置きなおす。すると売れる。表紙に思いがけない解釈を発見するからだ。一冊の本は人の思いで売れる。内容と、そのかもし出す気配を受けとって並べる人との微妙な調合の力が、本を手にする読者に何かを訴える。

並べ方で面白いねと言われるのに、一冊の本を三ヵ所ほどに陳列している事がある。三回眼にした時、「買うしかない」と思うと。本への愛情と畏れが無意識にそうさせる。これが本屋の「リアル」だと思う。気になってならない本があるのだ。

先日そんな話をしていて、はじめて気づいた。「なんでも」というのは「モノ」を中心に考え、「どれでも」というのは「人」を中心に考えてのことだ、と。なじみのお客さんの喜ぶものは「どれでも」並べますよ、それが私の仕事。

---

⑦「本」の底力

私は「身の丈」という言葉が好きだ。昔読んだ本に利休の茶室がなぜどんどん小さくなるかの理由に、中華という巨大な文化に対抗して、というのがあった。オルタナティブ（もう一つ他の）というのは、既存の価値観からでなく、自分から始まる同心円を生きてみるということ。だから身の丈へと縮む。でもこの狭さから、コントロールを自在にする広がりの力が生まれる。

読書もそのような身の丈の出来事だ。「本」の世界はなぜかくも居心地がいいのだろう。それは目線の高さが同じものを求めて読むからだろう。一味同心の世界だ。

定有堂の人文書の中で、とくに女性にすすめるのは内田樹さんの本だ。考えるヒントの楽しさが続出する。テーマは「コミュニケーションバランス」の形成だと思う。女性は、なんとなく自分の立ち居地がわかりにくく、不安に思う人が多いようだ。「本」は、自分の視野を拡張させる。と、見通しがよくなる。内田さん流にいうと生存確立が高くなる。友を選ばば書を読みて六分の侠気四分の熱、でしたっけ？「本」を媒介としての「人」との関わりは、心がつながる基盤だと思う。本はつなげる力だ。

「教養」には高揚感がある。「知のリング」に上がって、日常とはもう一つ別の時空で琢磨し合える。例えば、定有堂の「読む会」は職域では出会うことのない人たちが出合える貴重なひと時だ。ここには異なる生活の現場から交わされるとてもいいバランスの応酬がある。

「本」の底力は、凍えて居つきがちな自分の心を言葉の力で駆動させ、人から人へとつなげていく力なのだと思う。

---

⑧本屋の身の丈

「本屋の青空」という言葉が好きで常用する。何んなのだろう？長期老人介護などで、自称ほとんどウツ状態の細君に問うと、「言葉で脱皮してとにかく突き抜けること」と答える。

細君はすごい読書家で、介護のかたわらどんどん読み込んで、私にレクチャーしてくれる。抹茶を立てながらの「演説タイム」も毎日ある。最近は春日武彦さんがいいらしい。細部に永遠を見出すことで突き抜ける（ミニチュア趣味）。幸福は断片にあるんだそうだ。

ながい時間を費やして進む「地域」の崩壊を突き抜けて考える時、私は海野弘さんの『ハイウェイの誘惑』をバイブルとする。商業考古学つまり終焉からの考察だ。車による高速ネットワークで「往来」が息絶える。「中抜き」というダークサイドが広がる。高速道は「橋」であって「往来」ではない。「ネット」は同じ事を地球規模で企てている。

定有堂の「読む会」は最近日本思想史学者テッサ・モリス・スズキさんの『北朝鮮へのエクソダス』を読んだ。弱者切捨て先進国のイギリスを逃れてオーストラリアに住む。イギリスの体験から、空洞化日本の行く末を先取りする視点が秀抜だ。バサラな日本人と結婚したせいもあり、発想もバサラだ。「まち」（古い共同体）を壊した元凶を国民国家と照準する。

「読む会」にはいろんな人がいる。民団の団長を務める人もいて、尽力で、6月末にテッサ・モリスさんの講演会を共催で実施する。マイノリティという「断片」の中に「全体の幸福」の手がかりを探求する作業となりそうだ。